思春期スイッチ。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
思春期スイッチ。

【Ｎコード】
Ｎ８１９８Ｙ

【作者名】
乾　弘毅

【あらすじ】
やたらお金のかかるバレエを辞め、これからは充実した学生生活と安定した進路を目指そうと猛勉強の末に主席で高校に入学した梶川愛。
あのときバレエを続けていたら…、なんて自分にも誰にも言われたくないから、勉強も友達も恋愛も、ぜったいぜったいガンバるのだ、と健気なカンジで生徒会長の伊藤和也の思春期スイッチを連打するお話です。

1。順風満帆なようで前途多難かもしれない

入学式で新入生代表の挨拶をするという晴れ舞台から梶川愛の高校生活は始まった。
ぜひこの調子で順風満帆な3年間を送りたいと思います。

にやり。

高校生活を充実させるために部活やったほうが良いかなぁ、と松村さんと話していたら、たまたま通りかかった中井さんに「新入生代表は創己会に入るんでしょ」と言われた。
ソウキカイ？機会部とかなんか？とは違うよね。
「生徒会執行部。3年間ずっとではないかもしれないけど、1年生の間は創己会所属のはずだよ」
知らんかった。
中井さんは3年生に創己会所属のお兄さんがいるので詳しいらしい。
「でも先生にはなんにも言われてないよ」と言ったら、お兄さんに確認してくれることになった。

中井さんによく似た雰囲気の眼鏡男子に案内されて創己会室に行くと、そこには3人の先輩がいた。
この4人以外は行事や会議があるときしか顔出さない人がほとんどらしい。
3人の中のひとりは入学式で在校生代表挨拶をした生徒会長の伊藤和也先輩だったのですぐ分かった。
マッチョ系イケメンという名の壁、と記憶したので忘れることはないでしょう。
あとの女子ふたりはまだ覚えられない。
名前は覚えた。

どっちかが副会長の三井香奈先輩でもうひとりが書記の藤井紗英先輩。
中井さんのお兄さんは会計だそうだ。
ところで伊藤先輩の機嫌の悪さがハンパない。
ただ黙ってるだけなのに空気がピリピリして、三井先輩も藤井先輩もずっと腫れ物に触るように接している。
私のせい？なわけないよね初対面だもん。
なんかものすっごいめんどくさいカンジ。
「中井先輩、伊藤先輩の思春期スイッチが押されていて怖いので帰って良いですか？」
小さな声で言ったつもりだったのに聞こえたらしい。それまでそっぽを向いていた伊藤先輩とバッチリ目が合ってしまった。
やばい。
身の危険を感じたのでとりあえず何事もなかったかのように笑ってごまかした後そのまま退室した。
そして人生最速のダッシュで帰宅した。

きっと初めてあった新入生のことなんて次回までには忘れてくれてると思います。

2。蝶の夢

お昼休みは学校探検がてらあちこちでお弁当を食べることにしている。
学校通の中井友美ちゃんに案内役をしてもらって、入学試験で仲良くなった松村有里ちゃんと、同じ中学出身の山口美幸ちゃんとで食べてます。
今日は体育館のステージの端っこ。
体育館は飲食禁止ですが、ステージ脇は人が来ない絶好の隠れ家だそうです。
校内放送もちゃんと流れてます。
「…あ。蝶の夢だ！梶川愛、踊ります！」
スピーカーから流れてきたのは、最後のバレエコンクールで踊った曲だった。

幼稚園から始めたモダンバレエは2年ちょっと前まで私の生活のほとんどだった。
8月のイベント公演、9月の発表会、１０月の芸術祭、１１月の海外公演、１２月のクリスマス公演、1月には教室選考があって、選ばれれば2月からのコンクールが全国までいけば3月末まで続くことになる。
お金がかかっていることは分かっていたけど、ひとりっ子だから大丈夫なのかな？と深く考えたことはなかった。
中1から中2に進級した春休み、お父さんに「話がある」と言われて初めて知った。
私のバレエのせいで家にはもうお金がなかった。
「お前が本気でバレエを続けるつもりなら今後は借金でもなんでもして賄ってやる」そう言ってくれた。バレエ教室をかえても良い、宝塚音楽学校を受験したって良い、でも学生らしい生活のない人生

を選ぶことに後悔がないかだけが気掛かりだ、よく考えなさい。

それまでは、このままバレエを続けながら高校に行って、卒業したらバレエ教室の推薦枠でロシアに留学して、帰ってきたらバレエ教室の先生になるもんだとばかり思っていた。
でもそれはそれでものすごく贅沢なことで、ちゃんとした考えもなしに選んで良いことではなかったことに、私はそのとき初めて気づいた。

よく考えて、高校生になることにした。
優秀な高校生になって、学生らしい生活もバッチリ堪能して、できれば推薦入試で国立大学に入って、奨学金で薬剤師とか安定感のある職につきたい。
お父さんお母さん見ていてください。愛は2人に後悔はさせませんよ。

バレエは大好き。
でも私にはもっと違う生き方もあるはずだ。

ニーアップをふわりと決めたら足の甲が痛かった。
悲しいような、いっそ清々しいような。
踊り終わって、くるくるーとターンでみんなのところに戻ると、おや？人が増えている。

中井真先輩と伊藤和也先輩だ。
がーん。

…ぜったいどっかでパンツ見えてるわー。

3。ミシンかたかたシュークリーム

1年生で創己会に入ったのは私だけ、人材育成枠なので実務ではなく雑用が主な仕事です。
今は5月に行われる運動会に向け、創己会のネーム入り腕章を製作中。
イマドキ女子は縫い物が苦手らしく、おかげで自宅から持ち込んだロックミシンとコンピュータミシンで基地をつくり大変居心地の良い空間のなかひとりで作業しております。
腕章なんて、バレエ時代に作らされたブツに比べればギャザーもないしスパンコールもないし、ちょろいモノですよ。おほほほほ。
「ご苦労様。ゴメンね手伝えなくて。シュークリーム買ってきたしコーヒー入れるから休憩して？」
優しい三井先輩がさらさらの髪を揺らしながら甘やかしてくれたりもするし。
創己会サイコー！
高校生活サイコー！
高カロリーサイコー！
コーヒーにも砂糖とミルクをたっぷり入れてあまあまにするのだ。
うふふ。
目の前で中井先輩が「入れすぎ…」と呟こうが伊藤先輩がどん引いていようが気にしない気にしなーい。
むしろ手をつけないならそのシュークリームも私にちょうだいちょうだいなのだ。
ニコニコと笑顔をはりつけたまま、まずは中井先輩をロックオン。
「…欲しいの？」
うんうんうん。
じゃあ…、と中井先輩がお皿をこちらに差し出してくれようとしたとき「待て」と伊藤先輩の声がした。

「俺のをやる」
なぜかどこかで思春期スイッチを押されたらしくめんどくさいカンジに機嫌が悪くなっている。
中井先輩しか見てなかったので全然気づかなかったけど、何がスイッチだったんだろ？
伊藤先輩の機嫌が悪いと室内の雰囲気が悪くなるので今後の対策のためにも何がスイッチか分かると良いんだけど？
でもせっかくなので気が変わらないうちにいただけるモノはいただこう。うふっ。

中井先輩と伊藤先輩のシュークリームがのった皿を左右の手にひとつずつ持って「三井先輩、コーヒーおかわりくださいねっ？」と振り向くと、三井先輩がどこかでおもしろスイッチを押されたらしく、やたらとバカウケ中だった。

4。私たちは違う道を選んだ

美波ちゃんが訪ねてきた。

「愛ちゃん…」

私の顔を見たとたん泣き出した美波ちゃんを私は抱きしめた。

「大丈夫だよ。泣かないで」

美波ちゃんは私がバレエを辞めてから2年連続センターを踊っている。今年のコンクールではソロパートも付いた。でも残念ながら結果は期待されたほどではなかったそうだ。

そのことで他の研究生にずいぶんつらく当たられているらしい。

「もし連絡があったら、できれば励ましてやってほしいの」と美波ちゃんのお母さんに電話で頼まれたのは、４月になったばかりのことだった。

私がセンターだったときにはむしろ美波ちゃんが私をイビリ倒していた。

お嬢様育ちで悪気はないんだろうけど、それなりに悪意を感じる人でした。

…。

もう過去の話です。

それに高校生のいまセンターで踊るということは、バレエ教室のリーダーであるということで、それは中学生の私がセンターだった時よりもはるかに重たい意味を持っている。

だから、お世話になったバレエ教室の先生たちのためにも、私は彼女を励まして前を向かせなくてはいけないと思う。

「ねえ美波ちゃん、中1の時のコンクールで踊った蝶の夢を覚えて

る？あれからもうずいぶんたったよね。私はバレエを辞めて、美波ちゃんはずっとバレエを続けてきた。いまの私はもうニーアップも上手くできないし、美しいポアントもできない。でも美波ちゃんは違うよね？いまの美波ちゃんがセンターなのは、努力を続けてきたからだよ。私がセンターだった時より、他の誰より、その場所が相応しいからだよ？」

美波ちゃんは、本当はいない私と自分を比べて苦しんでいる。
バレエを辞めずにたゆまぬ努力を続けて高校１年生になった梶川愛。
そんな人はどこにもいない。
そのことを、ちゃんと理解しないといけない。
美波ちゃんも私も。

私たちは、違う道を選んだんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8198y/

思春期スイッチ。

2011年11月27日09時47分発行